



謹賀新年



教職員の皆様、新年明けましておめでとうございます。
新たな決意を胸に、良き年をお迎えになられたこと心からお喜び申し上げます。

さて戦後社会の歩みの中、教育、子育てまでもが分業化され、「教育」＝「学校の責任」という図式が強まり、そこから様々な教育問題が生起しています。おそらく、子どもたちと生活を共にする皆様は、そのことをより切実に感じられていると思います。

本市は、私たちの心を癒す美しい大自然の恵み、豊かな歴史や伝統、誇れる多くの文化財や活力に満ちた人々等々、教育・子育てにとっての宝庫と呼ぶにふさわしい町です。

この肥沃なふるさとを舞台に、今、学校教育はもとより、文化・芸術分野、さらにはスポーツ活動等、生涯学習の各フィールドにおいて、“つながりによる人づくり”を合言葉に、崩れかけているコミュニティの再生に精力的に取り組んでいただいておりますが、実はその底流に流れる願いは、地域全体に“責任を共有する文化”を創ることなのです。

では、本来学校が責任を持って担うべきこととは何なのでしょう。

皆さん方それぞれ、子どもたちとの出会いの中で重心を傾けたいものを持っておられると思いますが、特に大切にしなければならないことは、子どもたち一人一人に、「自分には自分なりの力があるという感覚を育む」教育を行うことではないでしょうか。つまり、「有能感」を育てることです。

特に学童期や思春期においては、集団生活を通して自尊感情を高め、対人関係を豊かに構築する訓練は大切です。他者との感情表現のやりとりや集団での活動を活発に行うことで他者への理解が深まると同時に、自分自身に豊かな感性が形成され、自己肯定感や社会的スキルが身に付いていくわけです。つまり、他者との関係性の中での葛藤やつまずきなどの体験が、自分の力に対しての自信につながると同時に、他者を傷つける言動への抑制力として機能するようになるのです。

こうした訓練を行うためには、子どもたちにとって、学校を、教室を、子どもたちがこれからの人生に必要なエネルギーを蓄え、未来の空に力強く飛び立つ力を増幅させる止まり木にすることが大切となります。

私たちの大先輩である齊藤喜博氏は、その著書『授業の風景』の一節に、

『教師は、授業で、どのような言葉を子どもに投げかけ、揺さぶり、子どもの脳を活性化させるか。そして、いかにその子なりの表現を引き出していくか。教師は、教室という土俵の中で、そういう厳しい授業によって、子どもと対決して勝負するのだ』と、教師の授業の姿勢について鋭く指摘しています。

氏の言葉通り、学校は、教師と子どもが体と体をぶつけ合い、魂と魂とをふれ合わせる道場であり、私たちは授業で勝負しなければなりません。その中で子どもたちは、一生涯忘れられないものを心に刻んでいるのです。

「教育とは、学校で習ったことをすべて忘れたあとに残っているところのものである」というアインシュタインの言葉が思い起こされます。

教育に王道はなく、日々の授業改善の積み重ねが子ども一人一人の生き抜く知恵の糧となります。様々な教育課題が山積する昨今、未来を託すことのできる子どもたちと共に生きる特権を与えられた皆さん方には、是非、“子どもたちと夢を語り合う教育”に一層力を注いでいただきたいと願っております。肯定的な熱い思念が、すべての子どもたちの内言語としてあふれかえる日が近からんことを切に願うところです。

平成25年癸巳 正月

河内長野市教育委員会 教育長 和田 栄



くろまる
©河内長野市 2013